

ばんげん
萬元

名は慧海、通称萬元、奈良県吉野郡下市町広橋の出身。吉野朝忠臣の末裔とも、公家のご落胤とも伝えられている。俗姓は広橋。幼にして聡明で、3歳の頃、母は伏見殿につかえていたが、なぜか一時吉野の奥へ追われる不遇の身となった。

16歳（15歳とも）で比叡山に登り、憲海上人の下で剃髪得度した。22歳の頃（御巡見案内帳）叡山を下って雲水の旅に出て、各地を巡りながら、天和2年（1682）24歳の夏、北陸行脚のわらじを履いて越後入りし、島原の里（黒埼村）の庄屋役、笠原重宅家に宿を求めてしばらく滞在。

そこからさらに白根・加茂などを歴遊、原田家文書によれば、長岡・柏崎などを経て佐渡へ向かう予定で寺泊へ出たが、厳しい冬とて渡海もならず、国上寺に良長僧都を訪ねたという。寝食を共にしながら親交を重ね、良長の下で真言密教を学んで修行した。本堂があまりにひどく荒廃していたので、その再興を約して永住。後に国上寺の塔中である檀家三十軒ほどの普賢院の住職となり、国上寺で夏・冬に近辺三九か寺の僧を集めて行われる勸学院（談林所）の研修、報恩講などの運営にあたった。

伝えられる上人の主な業績に、次のようなものがある。

◇本堂再建

国上寺の本堂再建では「萬人講」を組織し、庄屋衆へ勸進帳を送って奉加を依頼、自らも布施を求めて東奔西足した。良長方丈から泰然方丈まで、歴住六代30数年間にわたって献身、本堂再建の資材の運搬にも采配を振るった。伽藍建立を目前にして火災ですべてを焼失、しかし、屈することなく周囲を叱咤激励して再建に奔走した。

享保3年（1718）5月ようやく落成、6月には盛大に落慶法要が厳修された。無念にも上人は法要への参列も果さず、行脚の途次、新潟の町田津右衛門宅で発病遷化されている。国上寺では上人を開基以来の功労者として、歴住でもないのに中興開山と仰ぎ、本堂に木彫座像を安置して永く敬仰している。

◇紛争仲裁

萬元は日頃一般から「五合庵様」と敬愛され、家庭や地域でのさまざまなもめごとの仲裁役をつとめていた。

お上への上納をめぐって、佐善三か村と矢作村との土地のなすり合いによる境界争いの際には、仁徳をもって紛争に介入して和解させ、地図の上を黒点で綴り、現地に植樹して両者立ち会いで境界線を確定してやった。また、西川枯渇による水争いには近隣のこと、黙視傍観はできないと人足を手配して堰の工事を手伝わせ、その沈静化につとめている。

万治元年（1658）生まれ。

享保3年（1718）3月23日没 60歳。